

## 言語の彼方へ --- 時空に息づく

中村英樹

美術評論家・名古屋造形大学名誉教授

生き物の長い歴史のなかで、私たち人類は、他の生き物にはない言葉の仕組みを創り出し、それを駆使して豊かな文明社会を築いてきた。まず、自らの口から発する音声を細かく分割し、組み合わせてそれに特定の意味を持たせる。次いで、絵から絵文字へと進化した「手の痕跡」をさらに明確に区切り、簡略化して表意文字や表音文字を工夫し、その組み合わせや入れ替えによって、それぞれの単語に固有の意味を表わすようになった。

視覚的に対象化された持続可能な文字や記号は、一体的な外部世界を細かく分節化 (articulation) してとらえさせ、その複雑な組み合わせの改良の繰り返しによる知的な思考の深まりは、生物学的環境に拘束されない高度な文化をもたらす。しかし、言語によって仮に分節化され再構成された世界像が外部世界そのものと混同され、言語による仮設的な所産に他ならない観念 (idea) や概念 (concept) が実体化されると、人々は、逆に言葉によって拘束され、本来の身体的存在として望ましい生き方を妨げられることになる。

フランスで生まれ育ち、日本の金沢に移り住み、多くの国々で個展やグループ展を開く女性美術家セシル・アンドリュの作品制作の根底には、異なる言語の間を行き来しつつ、既成の言語の形骸化した枠組みによる弊害から自己を解放し、外部世界に立ち向かうために有効な言語に共通する仕組みの基本だけを「生きるための力」として視覚化しようとする動機がうかがわれる。人を拘束する個々の単語の「意味」が物理的な方法で消去され、言語による「生きるための力」が現実の時空のうちに間接的な仕方では表わされる。

一文字一文字を修正液で消した数多くの書物や般若心経が展示空間の壁や床に規則的に並べられた 1990 年代初め頃発表の作品から、フランス語辞書をシュレッダーで裁断した細片の詰められた無数の試験管が放射状に壁から広がる《開かれた言葉》(2011 年、表紙裏) や、群生する緑色の竹の幹一本一本に黄金色の布を巻きつけた、直接は言葉と関わりのない《光の束》(2012 年、p.44)、日本語・中国語・フランス語の辞書の細片と石灰で器状の凹面の大円形を満たした《沈黙の点》(2014 年、p.8) に至るまでの作品を通観してみると、ほとんどに当てはまるある共通点が浮かび上がる。

共通点として挙げられるのは、「数多くの同じ形態の集まり」、あるいは「膨大な数量の同じような細片の集まり」という特徴で、多くの作品がその両方の特徴を兼ね備えている。例えば、黄金色の布を巻きつけた群生する緑色の竹は、「数多くの同じ形態の集まり」、器状の凹面の大円形を満たす裁断された辞書は、「膨大な数量の同じような細片の集まり」である。辞書の細片が詰められて放射状に広がる無数の試験管では、両方の特徴が重なり合う。すべての文字が消された書物などを並べた 1990 年代初めの作品もそれに等しい。

ところで、言語に共通するもっとも基本的な仕組みは、無数の升形を縦一列、または横

一列の直線状に順序良く並べ、縦の列の左に別の縦の列を次々に連続して加えたり、横の列の下に新たな横の列を幾つとなく重ね合わせたりすることによって成り立つ。共通点として挙げた「数多くの同じ形態の集まり」や「膨大な数量の同じような細片の集まり」は、言語の「意味」を消去したり、言語から距離を置いたりしつつ、まさに、その言語共通の基本的な仕組みだけを顕在化して体感させる。

このアーティストは、連続する升形そのものである日本の原稿用紙にも関心を抱く。裁断された新聞紙の細片で一杯の農業用の育苗トレーを縦横 10m 以上連ねて宙づりにした《カルチュラル<sup>2)</sup>》(2010 年、p.36) は、その升形の連続を巨大化したインスタレーションで、フランス語の Culture が農耕と文化双方を意味するように、下から暗い底部を見上げると耕される土を思わせ、上から見下ろせば原稿用紙に似て升形が並び、いったんかき消された文字が文化の原点に立ち戻ってもう一度芽生え始めるかに見える。

彼女は、展覧会に際して展示空間の正確な模型を作り、そこに作品の雛形を置いてみる。見る人が包まれる時空こそ、作品の居場所なのだから。いずれにしても、作品は時空の内なる物質としての属性を明らかに示す。その属性の明示は、文字言語が時空の内なる物質的な痕跡であることに立ち戻り、時空に息づく人の営みの力強さを取り戻そうとする制作者の意志の表われだろう。表面が辞書の細片で覆われた大きな基石のような形が並ぶ《沈黙の石》(26 点組、2013 年、p.12) は、床面から浮き上がるかのようで、静かに時空と一体化している。

言葉の拘束を超え、言葉の原点に人間の生きる力を求めようとするセシル・アンドリュは、既成の美術の枠組みに安住することなく、人類史的な視野に立って新しい視覚的表現を切り拓こうとする。フランスや日本など異文化の間に意識的に身を置く姿勢は、どの文化をも見通す視点によってさらに視野を広げ、作品の可能性を増すことになるだろう。